

ヘブル11:17-22; 「世代の信仰」 2025年4月27日

I. 歓迎とレビュー

A. おはよう! おはようございます! カルバリーチャペル岩国へようこそ。

1. 新顔やネット配信者を歓迎する。抑止力

B. これ以上話を続ける前に、小学生の子どもたちを日曜学校の教室に解散させよう。

1. (2nd礼拝; 聖書英語のクラスは忘れずに解散する)

C. 今朝は、いよいよヘブル人への手紙の学習に戻る。

1. 私たちは5週間前にヘブル書の11章と「信仰の殿堂」を始めた。その後、私たちのチームはフィリピンに行った。
2. 私が不在の間、ケビンは説教壇を見事に埋め、11章の学びを続けたが、フィリピンからのチームが戻ってくると、私たちはヘブル書の学びを一時中断し、宣教の重要性について分かち合い、フィリピンへの旅についての詳細を分かち合った。
3. その翌週は棕櫚の日曜日だったので、イエスの凱旋を記念する特別な学びの持った。
4. そして先週、私たちはよみがえりの王を祝うために、由宇ビーチで素晴らしい時間を共に過ごした。神は雨を降らせることなく、私たちに素晴らしい時間を与えてくださった。何人かの人々がバプテスマによって信仰を告白し、食事と交わりの素晴らしい時を過ごした。
5. しかし今朝は、いよいよヘブル人への手紙11章と「信仰の殿堂」の学習に戻る。
6. この章はしばしば「信仰の殿堂」と呼ばれるが、それは著者が信仰生活を送り、神を信じ、神と神の約束を信じた何人かの人々について言及しているからである。
7. この章の学びを始めた当初、私たちはアベルの信仰と、彼が礼拝を通してどのように信仰を示したかに注目した。エノクの信仰と、彼がその歩みを通してどのように信仰を示したかを見て、ノアの信仰と、彼がその働きを通してどのように信仰を示したかを見た。
8. そしてケヴィンは、アブラハムの信仰と、それがどのように信頼、テント、そしてより良い町と関わっていたかを教えてくれた。アブラハムは神がカルデアのウルから神が示される土地に移り住むようにと言われたとき、神を信頼した。彼は出発してカナンの地に店を構えたが、そこで生活を立て直すことは考えず、ただ通り過ぎるだけの巡礼者として生きることを選び、テントに住むことを選んだ。彼はその神の都、神によって彼らのために用意された国、永遠の故郷を待ち望んでいたのだ。
9. アブラハムは信仰によって生き、信仰によって死んだのであり、受け取ったわけではなかったが、それでも約束をものだと主張した。

D. 今朝は、4週間前のケビンのアブラハムの話の続きから、ヘブル書の学びを続ける。

1. アブラハムと彼の信仰生活についてもう少し詳しく読んでいくが、彼の息子たち、つまりユダヤ民族の家長として数えられているアブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフの信仰についても見ていくことにしよう。
2. 私たちのテキストはヘブル人への手紙11章17節から22節で、今朝のメッセージのタイトルは「世代を超えた信仰」である。
3. 今朝、手元に聖書があることを願う。もしそうなら、ヘブル人への手紙11章を読んでほしい。もし聖書を持っていないなら、周りの椅子の下にある聖書を借りて読んでみるといい。神の御言葉が何を語っているのかを自分の目で確かめ、私たちが神の御言葉を通して学ぶときに一緒に読んでみるのが大切だと思う。
4. ヘブル11章に入ったらもし可能なら、神と神の聖なる御言葉に敬意を表して、立ち上がっていただきたい。
5. 私の聖書からテキストを読んでいこうと思う。NKJVから読むつもりだが、もし他の訳をお持ちなら、ご自分の訳による最善を尽くしてほしい。ヘブル人への手紙の著者は、11章17節で信仰の殿堂を巡る旅を続けている。

II. イントロ

A. 著者は、10章の終わりにハバクク書から引用した後、11章でこの「信仰の殿堂」に入ったことを思い出してほしい。

1. 10章の終わりで、著者は聴衆を励まし、信仰を続けるよう勧めている。
2. 彼の聴衆は、信仰のためにいくつかの困難や迫害を経験していた。彼らは、キリストへの新しい信仰を捨て、ユダヤ教と律法に従う古いやり方に戻るよう迫られていた。
3. 著者は、彼らがすでに苦しみとの大きな闘いに耐えてきたこと、そしていかに忍耐が必要であったかを思い起こさせた。彼らは引き返すことなく、信仰を前進させ続ける必要があった。
4. そして、ハバククの言葉を引用した。"正しい者は信仰によって生きる"。(ヘブライ 10:38a)
5. そして、彼らを奮い立たせる方法として、彼はこの章に移り、彼らに必要な信仰の種類を示した自国の過去の男女にスポットを当てる。あきらめない信仰、困難で困難な時代にも耐え抜く信仰である。

B. 今朝のテキストで、著者はユダヤ家父長たちを振り返っている。父アブラハム、その息子イサク、その息子ヤコブ、そしてヤコブの息子ヨセフである。それぞれが神と神の約束に対する同じ信仰を分かち合っているが、それぞれが独自の方法で信仰を持っている。

1. この4人はそれぞれ信仰を持ち、信仰によって生きていたが、それぞれが異なる人生を送り、異なる状況を経験することで、信仰を明確にし、信仰を深めていった。

2. では、この4人の家父長をそれぞれ見て、彼らの信仰生活から私たちがどんな教訓を学べるか見てみよう。

3. まずは父アブラハムの17-19節を見てみよう。

III. ヘブル11:17-19; アブラハムの信仰

A. 前回、私たちはヘブル人への手紙の中で、ケビンはアブラハムの信仰生活について素晴らしい教えをしてくれた。

1. アブラハムは、神と神の約束をいかに信頼したか。アブラハムは、この世やこの世のもののために生きたのではなく、ただ巡礼者、寄留者として、主なる神ご自身が造り主であるあの都と探し求め、待ち望んでいたのである。

2. アブラハムは、神の約束の成就を目に見える形で実感することなく、信仰のうちに死んだが、遠くで約束を見て、それを受け入れ、自分のものとして告白したと言われている。

B. しかし著者は、アブラハムと彼の生きた信仰生活についてもっと言いたいことがあったので、この節でアブラハムを再び取り上げ、聖書全体を通して読むことができる最も偉大な信仰の行いのひとつを強調している。

C. 前回、ヘブル人への手紙11一緒に読んでいたなら、ケビンはアブラハムとサラの息子イサクの奇跡的な誕生について話した。

1. アブラハムとサラは出産適齢期を過ぎていたからだ。アブラハムとサラは不妊症に苦しんでいた。何年もの間、彼らは自分たちの子どもを持つとうとしたが、成功しなかった。年月が経つにつれて、自分たちの子どもを持つという思いは薄れていき、自分たちの子どもを持つことをあきらめていたに違いない。

2. そして、あることが起こった。神はアブラハムとその妻サラを召され、カルデアのウルにある彼らの家を出て、神がやがて示される未定の場所に移住させた。

3. アブラハムとサラが家を出てカナンに向かうよう召されたとき、神はアブラハムにも語りかけ、彼を大いなる国民にすると告げられた。

4. そして彼らが信仰によって足を踏み出し、カナンの地に降り立ったとき、神は再びアブラハムに語りかけ、こう告げた。(創世記12:7a)

5. さて、彼の子孫に土地が与えられるためにはもちろんアブラハムに子供がいなければならない。この子孫の約束は、もしかしたら、もしかしたら、もしかしたら、アブラハムとサラが75歳と65歳で子供をもうけるのは遅くないかもしれないという希望の光をもたらした。

6. しかし、アブラハムとサラには子供ができないまま10年が過ぎた。そこで二人は、自分たちの手で問題を解決しようと決心した。神に手を差し伸べ、神がアブラハムに子孫を残すという約束を実現するのを助けようとしたのだ。

7. サラはアブラハムに、彼女の召使ハガルと関係を持ち、彼女を通して子供を得ることを提案した。その結果、肉の業であるイシュマエルが生まれた。

8. しかし、イシュマエルは、神がアブラハムとの約束を果たすために使おうとしていた人物ではなかった。神はアブラハムとサラに、アブラハムのための子孫の約束についてこれ以上何か聞くまで、この出来事の後さらに10年以上待たせることになる。

9. アブラハムが99歳の時、神がアブラハムに現れ、アブラムからアブラハムに名前を変えた。アブラハムが100歳、サラが90歳のとき、神の約束はついに成就した。そして、アブラハムが100歳、サラが90歳のとき、神の約束はついに成就した。

D. イサクという名前は、文字通り笑いを意味し、100歳、サラは90歳で子供が生まれると聞かされたときのアブラハムとサラの反応から、そう名付けられたと思われる。

1. しかし、この名前は、アブラハムとサラに喜びを点でも、ふさわしかったのだろう。彼らはこの約束の子を見るたびに、神が自分たちに与えてくださった貴重な贈り物に対して、大喜びで笑うしかなかった。

2. そしてイサクは、何十年の間、子宝に恵まれずにいた両親に、イサクがもたらした喜びと笑いについて聞かされて育ったことだろう。神はついに約束を果たされ、アブラハムとサラに自分たちの子孫と呼べるものを与えられた。

E. そして、創世記22章は、これまで記録された中で最も偉大な信仰の試練のひとつとなった。今朝のテキストは、アブラハムが経験したその試練を思い起こさせる。

1. 創世記22章で、神は再びアブラハムに現れ、何を言われたかは想像することさえ難しい。神は「アブラハム！」と言われ、アブラハムは「ここに」と答えた。そして、モリヤの地に行き、わたしがあなたに山の一つで、燔祭としてささげなさい」(創世記22:2)。(創世記22:2)

a. 神はアブラハムに、一人息子(神はイシュマエルをアブラハムとサラの嫡子とは認めていなかった。そして、神が丘の中腹で、アブラハムは息子を生け贄として神に捧げるな

2. さて、私たちは聖書のこの記述を読み、これが試練であったことを理解する特権を持って。本文の17「受けるとき」とある。

この章の冒頭で、神がアブラハムにイサクを生け贄として捧げるよう求めたのは、試練であったと述べている（創世記22:1a）。（創世記22:1a）

- a. 神は、アブラハムが神に従順であり、一人息子、約束の息子、喜びと笑いの息子、彼が生涯待ち望んでいた息子、神が奇跡的に与えてくださった息子を喜んで差し出すかどうかを試しておられたのだ。
 - b. アブラハムは彼をことを厭わないだろうか、彼が生涯で最も大切にしてきたものを犠牲にすることを厭わないだろうか？
 - c. 神はアブラハムと彼の神への信仰を試されたのだ。試されない信仰は信頼できないと言われている。神はアブラハムに働きかけ、アブラハムの神への信頼を深めようとしたのだ。
 - d. 神はアブラハムに、天の星のように、また海辺の砂のように数多くの子孫を祝福すると告げられた。
 - e. そして神はアブラハムに、100歳という高齢で授かった奇跡の子がその約束を果たすことになるかと告げた。しかしこの時、イサクはまだ誰とも結婚しておらず、子供もいなかった。
 - f. もしアブラハムがイサクをいけにえとして捧げたら、神の約束はどうなるのか。もしイサクが死んでいたら、どうして天の星のように数多くの子孫を残すという約束を果たすことができるだろうか？
3. しかし、アブラハムはその疑問のために、神から命じられた従順であることを妨げることはなかった。創世記の記述によれば、アブラハムは朝早く起き、ロバにいけにえのための物資を積み込み、イサクとともに数人の部下とともにモリヤの地へと旅立った。
4. 神が行けと言われた場所に着くと、アブラハムはロバから降りて部下に待つように言い、その間に彼と息子のイサクは神を礼拝するために丘の中腹に登った。
5. アブラハムは燔祭の薪を取り、それを息子イサクの背に負わせ、神がアブラハムにイサクをいけにえとして捧げさせようとした場所まで、丘の中腹まで運ばせた。
- a. ここで重要なことに注目してほしい。イサクはこの、小さな子供ではない。ほとんどの聖書注解者は、イサクはこの時10代、おそらくは20代前半のたくましい若者であったと考えている。彼は、いけにえに捧げるすべての木材を自分の背中で運ぶことができるほど強かった。
 - b. 見よ、火と薪はあるが、焼き尽くす供え物の子羊はどこにいるのか」（創世記22:7b）。
 - c. それに対してアブラハムはこう答えた。"わが子よ、神はご自分のために燔祭のための子羊を備えてくださる"。

6. 神がアブラハムに行くように告げた場所によりやく到着すると、アブラハムはそこに祭壇を築き、薪を並べ、息子イサクを縛り、祭壇の薪の上に寝かせたとある。
- a. これは驚くべきことだ。イサクが喜んで犠牲になったことを物語っているからだ。120歳の老人が20歳の青年に勝るわけがない。イサクは喜んでこれに参加しなければならなかった。彼は父に自分を縛らせ、祭壇の上に置かせた。
7. また、創世記22:10には、アブラハムが手を伸ばしてナイフを取り、息子を殺したとある。**創世記22:10**
- a. アブラハムは神に従うために、一人息を生け贄として殺そうとした。しかし、息子の胸にナイフを突き立てようとする直前、主の天使が天からアブラハムを呼び、「アブラハム、アブラハム! 」と言った。それに対してアブラハムは"ここにあります"と答えた。一人息子であるあなたの子をわたしから遠ざけなかったで、あなたが神を恐れていることがわかった」。（創世記22:11-12）
8. アブラハムはテストに合格したのだ。しかし、アブラハムがどのようにしてテストに合格したかについて、注目してほしいことがある。
- a. アブラハムは息子を生贄に捧げることを完全に予期していた。創世記の記述を読んで、このような展開になったのではないかと思うことがある。アブラハムはどれほどの時間、ナイフをしたまま立ち尽くし、神が「やめなさい! やめなさい。
 - b. しかし、聖書から得られる感覚はそうではない。アブラハムは、息子を殺すためにナイフを突き刺す寸前に、神が止めてくださるという信仰を持っていなかった。それはまったくなかった。
 - c. アブラハムは、さらに驚くべきことをなしてくださる神を信じた。アブラハムは、これまで一度もなされたことのないこと、アブラハムが見たことも聞いたことも経験したこともないことをなされる神を信じたのである。アブラハムは、神が息子を生き返らせてくださると信じていた。アブラハムは、自分が息子を殺すことを貫き、どうにかして、どうにかして、神がイサクを生き返らせてくださると信じていた。
 - d. それが聖書の示すところである。本文の19節を読むと、アブラハムは神が彼を死人の中からでもよみがえらせることができると確信していた。創世記ではアブラハムが部下とロバから離れる前に、部下たちにこう言った。（創世記22:5）。
 - e. アブラハムは息子を生贄に捧げることを承知で山に登ったが、部下への言葉は"必ず戻ってくる"だった。
9. アブラハムは神の約束を信じた。神はイサクを通して子孫の約束を果たすことを確認されたのである。

そこでアブラハムは、もし神が一人息子を殺すことを望んだのなら、神は息子を生き返らせる計画をお持ちに違いないと。

a. 驚くべき信仰だ。アブラハムは不可能を可能にするために神を信じた。それまで死からよみがえった人は誰もいなかった。アブラハムは、神が今までになされたことのないことをしてくださると信じ、信頼し、神は何があっても約束を忠実に守ってくださいと信じ、信頼したのである。

F. 本文19節の最後に、アブラハムは比喩的な意味でイサクを死から取り戻したとある。

1. アブラハムは結局息子を殺さなかったが、彼の心の中では、イサクはすでに死んでいた。彼は神に従って息子を殺すという事実に屈服し、心の中ではイサクはすでに死んでいた。
2. しかし、創世記22章によれば、アブラハムはイサクを殺すことを神に止められ、代わりにイサクのすぐ後ろにいた雄羊を生け贄として捧げられ、イサクを生き返らせた。
3. しかし、この出来事が比喩的であったという別の意味もある。私たちは、この出来事が、アブラハムの時代から何年も先の未来に起こることを指し示していたことを知っているからだ。
4. そこで御子は御父のご計画に屈服し、背中に薪を背負い、神へのいけにえとして喜んで命を捨てるのである。しかし、神がこのようなことをされたとき、「生まれ！」と呼びかける天使はいなかった。
5. 御子は犠牲となり、その命は流されたが、驚くべきことに、御子はよみがえられた。イサクが本質的によみがえり、アブラハムに贈られたように、神の御子イエス・キリストも死からよみがえり、最終的に天の御父と結ばれた。
6. アブラハムとイサクに関する記述全体は、世の罪を取り除くために死なれた神の独り子イエス・キリストの犠牲を指し示し、私たちに予表するためのものである。
7. このような美しく豊かで力強い記録はない。

G. では、私たちはアブラハムの驚くべき信仰の試練から何を学ぶことができるだろうか？ 神は私たちに、私たち自身の人生への適用方法として、どのような教訓を持って歩ませるだろうか？

1. 神が私たちに、子供たちを人身御供として捧げるように求めているとは思わない。実際、神の言葉が私たちに教えているのは、そのようなことではないと私は知っている。
 - a. 人身御供には興味がないし、愛する人を殺せとも言わない。

2. しかし、ここにも比喩的な教訓がある。神は、私たちが人生で最も大切にしているものを犠牲にすることを厭わないということを、私たちに教えようとしているのではないだろうか。

3. おそらく神は、私たちが神からの贈り物だとさえ感じているような何かを、神に委ねることを私たちの何人かに挑戦させようとしているのだろう。

4. 私たちは喜んでそのものを明け渡し、手放し、主にお返しし、主が約束を忠実に守ってくださいと信じているだろうか？

5. アブラハムは、生涯で**最も大切にしてきたものを喜んで明け渡した**。人間には不可能に思えることであっても、神は約束を忠実に守ってくださいと信じてそうしたので。

6. おそらく神は今日、私たちの何人かに、あなたが人生で大切にしなければならないものを、完全に神に明け渡すことをチャレンジしたいのだろう。あなたの人生に対する神と神の計画、神の約束を信頼することだ。これは、あなたの信仰にとって最も挑戦的な試練かもしれない。あなたは、自分が大切にしなければならないものを、喜んで主の御手に委ねることができるだろうか？ それはあなただけが答えられる質問であり、私はあなたがそれを心に留め、神があなたのうちに、そしてあなたを通して働いてくださることを願っている。

H. さて、私たちはアブラハムとその驚くべき信仰の模範を見た。**次の家長であるアブラハムの息子イサクの生涯**において、著者が私たちに何を強調したかを見てみよう。20節と一緒に読もう。

IV. ヘブル11:20; イサクの信仰

A. これは私にとって興味深い箇所である。もし私がヘブル人への手紙の執筆者で、このヘブル人への手紙11章に列挙されている人々の最も偉大な信仰の行いを強調する任務を負っていたとしたら、このイサクの行いを強調すべきものとして選んだかどうかはわからない。

1. イサクの生涯に関する聖書の叙述が限られていることを考慮すると、私は著者がアブラハムの生涯で行ったのと同じ出来事を強調すると思う。というのも、すでに述べたように、イサクは父アブラハムとともにモリヤの地の丘の中腹に現れたあの驚くべき信仰のデモンストレーションに進んで参加したはずだからだ。

B. しかし、そうではなく、著者はここで、イサクが信仰によって二人の息子、ヤコブとエサウを来るべきことについて祝福した出来事を強調することにした。

1. さて、表面的にはとても素晴らしい聞こえるだろう？

2. もしあなたがこの記述をよく知らなかったら、イサクは何か特別な家族のお祝いや特別な礼拝のために息子たちを集め、友人たち、おそらくは親戚やその他の愛する人たちの前で、息子たちを呼び寄せて一人一人のために祈り、彼らを主に向かって引き上げ、彼らに祝福を注ぎ、彼らの将来と彼らの上にある神のいつくしみについて預言的に語ったのだと思うかもしれない。

3. 現代の赤ちゃん奉納のようものだ。友人や教会の家族の前で、子供のために祈り、祝福を宣言し、子供とその将来に神の恩恵を求める。

4. 素晴らしいだろう？ 神を礼拝し、互いに愛し合う、幸せな大家族のような素敵な時間だ。
。
 5. 残念なことにイサクがヤコブとエサウを祝福したとき、これから起こることに関して実際に起こってことの真相にはほど遠い。
- C. この出来事の詳細は、創世記の27章に記されている。
1. ここで少し場面を設定しよう。イサクは、父アブラハムとモリヤ山で信仰の行いをした後、やがてリベカという女性と結婚し、二人は結ばれ、リベカは双子を身ごもった。彼女はイサクに二人の息子を産み、長子はエサウと名付けられ、二番目に生まれた子はヤコブと名付けられた。
 2. 創世記の記述を読み進めるうちに、彼らは一卵性双生児ではなく、二卵性双生児であったことが分かってくる。
 - a. エサウは一種の男の男に成長した。彼は毛深く、強かった。好み、荒野をさまよいながら日々を過ごした。
 - b. 一方ジェイコブは、気を悪くしないで言わせてもらえば、ちょっとママっ子だった。彼はあまり外に出ることを好まず、静かで平和な生活を好んだ。彼は温厚な男で、家で母親とテントにいることを好んだと描写されている。
 3. 聖書は創世記25章28節で、イサクはエサウの獲物を食べたのでエサウを愛したが、リベカはヤコブを愛したと伝えている（創世記25章28節）。
 - d. そして、このことは、イサクがヤコブとエサウの将来について祝福したことに関する詳細において、大きな役割を果たすことになる。
 3. さて、この特別な祝福についてだが、これはこの時代に発展した伝統のようなものだった。父親が亡くなる前に、その祝福を子供たちに伝え、父親が自分の死後、どのように物事を処理することを望んでいるかを整えることがよくあった。父は生得権と呼ばれるものを渡す。これは一般的に長男に与えられるもので、父親が生きている間に負っていたすべての責任と権威を長男が引き受けることを示すものだった。ある意味、バトンタッチなのだ。
 - a. 今日私たちが持っている遺言のようなものだ。人は年を取ると、そういったことを定期的に考えるようになる。自分の身の回りの整理整頓をし、この地上での生活が終わった後の家族のために準備したいものだ。
 - b. これはそのようなものだった。子供たちに祝福を受け、自分がいなくなった後、どうあってほしいかを伝える機会だった。誰が家族のことを取り仕切り、家族の中で新たな権力者となるのか。
- D. 創世記27章では、イサクが年をとって目がかすみ、よく見えなくなっている様子が描かれている。そして、彼はこの

事態がこれ以上悪化する前に、最後の祝福を伝え、生得権と呼ばれるものを植え付けるためである。

1. イサクが誰を最も愛していたかは、すでに分かっている。エサウを愛し、彼に祝福を与え、生得権を譲り渡そうとした。
2. しかし、それには一つ大きな問題があった。創世記25章で、リベカは妊娠を知ったが、あまり気分が。
3. その時、主はリベカに双子を授かったことを告げ、主はこう告げられた。"二つの国があなたの胎内にあり、二つの民があなたの体から分かれる。(創世記25:23)"
4. リベカは夫のイサクに、主が彼女に言われたこと、双子が生まれること、年上が年下に仕えることを話したに違いない。つまり、年少者が生得権を得、年長者が主の言葉に従って年少者に仕えるので、年少者に権威が与えられるということだった。
5. しかしエサウは、年長者が年少者に仕えることについて神が明確に言われたことに逆らおうとし、自分のやり方で物事を進めようとし、神がいることを台無しにしようとし、神が言われたことを実行する代わりに、自分が愛していた者、一緒に狩りをするのが好きだった者、アウトドアに出かけるのが好きだった者であるエサウに祝福と生得権を譲ろうとした。それは、彼が祝福したかった人だ。
6. そこで彼はエサウを呼び寄せ、基本的に自分は年老いていつ死ぬかわからないから、祝福をエサウに伝えたいと告げる。そしてエサウに、二人が大好きな香ばしい獲物を狩ってきて、それを持ち帰り、エサウが食べられるように食事を用意し、父アブラハムから受け継いだ契約の祝福をエサウに伝えるように言う。
7. イサクとエサウの会話を聞いていたのは誰だと思う？ それはリベカだった。そしてリベカは、自分の目の前でこのようなことが起こるのを黙って見過ごすつもりはなかった。
8. それで彼女はどのようにするのか？ 彼女はヤコブを捕まえに行き、自分なりの計画を練り始める。彼女はエサウに祝福を譲るといふ父親の計画をヤコブに話し、イサクを騙してエサウの代わりに自分を祝福させるために、この大がかりな見せかけに付き合うようヤコブを説得する。
 - a. 彼女は彼に、自分たちの群れからヤギを二、三頭取ってきて、自分のところに持って来なさい、そうすれば父親が好きな香ばしい食べ物を作ってあげるから、と言った。その間に彼は変装をし、エサウの服を着てエサウのような臭いをするようにし、さらに腕や首の後ろの滑らかな部分にヤギの毛を塗り、エサウのように毛深いという触覚を与えるつもりだった。ヤコブは滑らかな肌の男であり、父イサクに触られてエサウでないことを悟られたくなかったからだ。

- b. 多くの策略と欺瞞が行われている。この家族全員が、霊的祝福を得るために、人を操り、欺き、平気で嘘をつこうとしていることを考えると、とても気が狂いそうになる。意味がわからない。
- c. 機能不全家族といえらばいだろうか。彼らは皆、自分の道を確保するために可能な限りのことをしようと、自分の道を確保するために可能な限りの手段を使おうとしていた。嘘をつく、盗む、だます、欺く、あらゆることがテーブルの上にある。
9. リベカが食事の支度を終えると、ヤコブはそれを父のもとに持って行き、エサウであることを名乗る。イサクは少し懐疑的で、それはおそらく正当な理由がある。
- a. その声はヤコブの声だが、匂いと感触はエサウのものだからだ。最終的に、ヤコブとリベカはこの大なる欺きを成功させ、イサクはヤコブを祝福する。イサクはヤコブにすべての祝福と生得権を授け、二倍の分け前を与え、ヤコブが他のすべての者たちに対する権威の座につくことを述べた。
- b. イサクがヤコブを祝福し終わり、ヤコブが天幕を出ると、なんと、エサウが現れた。イサクは彼に誰なのかと尋ね、エサウは "あなたの息子、長男のエサウです" と答えた。
- c. そして、ここからイサクにとって事態が好転したと私は信じている。創世記27章に、イサクがエサウからその言葉を聞いたとき「非常に震え上がった」とある。イサクは心の底から震え上がった。(創世記27:33a)
- d. 彼は神を避け、神の意志にした。
- E. では、これがどのように信仰の例となるのかという疑問が湧いてくる。いったいなぜヘブル人への手紙の著者は、この欺瞞と策略と虚偽の網を信仰の行為として強調したのだろうか？
1. イサクは神のように振る舞っていただろうか？ リベカは、ヤコブは、エサウは、神として振る舞っていたのだろうか？ いや、彼らは皆、互いに篡奪しあい、嘘と策略によって互いを操ろうとしていた。
2. 本文には、「信仰によって、イサクはヤコブとエサウを来るべきことについて祝福した」とある。
3. イサクが信仰に目覚めたのは、自分がエサウではなくヤコブを祝福したこと、そして、神の告げられた計画を回避し打ち負かそうとする彼の決意にもかかわらず、神が自身のゲームで彼を打ち負かしたことを悟ったときだった。
4. 自分がエサウではなくヤコブに祝福を宣告したことを知ったとき、イサクは非常に震え上がった。イサクはその瞬間、どんなに計画や策略をめぐらせようとも、また、どのように操ろうとも、エサウの代わりにヤコブを祝福することはできないことを知り、理解したのである。

通そうとされた。イサクが乗っついていようといまいと、神は御心が成就するのを見届けようとしてきたのだ。

5. そして、彼はエサウに、すでに祝福を与えたと宣言した"私は彼を祝福した。(創世記27:33b)
6. イサクが神の意志と計画に降伏した瞬間だった。もう策略をめぐらすことも、神を避けようとするものもない。もう自分の思い通りにしようとはしない。イサクはその瞬間、神の意志を回避しようとすれば必ず負けることを悟った。
7. 信仰によって、**イサクは神を避けようとする自分のちっぽけな試みが無益であることを理解し、最終的に主を認め、基本的に「神よ、あなたの勝ちです」と言うに十分な認識を持っていた!** もう策略をめぐらせたり、操ったり、私の意志を通そうとしたりするのはやめよう。あなたはヤコブがより偉大になるとおっしゃいましたが、エサウは弟に仕えたとおっしゃいました。
8. もしかしたら、ここにいる私たちの中にも、あなた自身の人生で同じことをしようとしている人がいるかもしれない。神の御心を知っていながら、それを自分なりに解釈し、自分の思い通りになるように物事を操作しようとしている。イサクがしたように、神と神の人生に対する計画を回避することはできないということを、神はあなたに学んでほしいのだ。
9. 自分の意志を通そうとするのをやめ、自分の人生を完全に神の意志にゆだねる時だ。信仰によって、あなたは今日、自分の人生に対する神の御心に委ね、神と戦おうとするのをやめることができる。主と戦っているときには、決して勝つことはできない。

F. さて、進もう。人物があと二人いるし、時間もあまり。**ヤコブの信仰について**考えるために、21節を見てみよう。

V. ヘブル11:21; ヤコブの信仰

- A. ヤコブの生涯を振り返って、特に偉大な信仰の行いをひとつ挙げようとするなら、それは少し難しいだろう。ヤコブは策略家で、彼がどこでそのような行動を学んだのか、疑問の余地はない。
- B. 彼の人生を通して、彼は常に人を出し抜こうとし、知恵を使ってやり過ごそうとし、状況を利益のためのチャンスに変えようとしているように見える。
- C. しかし、ここで著者は、ヤコブが杖の上にもたれて神を礼拝しながら、二人の孫であるヨセフの息子たちを祝福したときのことについて、ヤコブの信仰について語っている。
1. これはヤコブの生涯の終わりにあった。彼は長い苦難の人生を送ってきた。叔父ラバンの手による陰謀も経験した(それは間違いなく家系的なものだった)。妻ラケルが12人¹⁰の息子を生んだ直後に亡くなり彼は喪失の痛みを経験した。彼は息子を失う苦しみを経験し、狼に引き裂かれたのではないかと恐れた。彼は大きな喜びと神の恵みも経験している。

2. そして、彼は人生の終盤に差し掛かり、死期が迫ったところで、ヨセフの二人の息子、エフライムとマナセに祝福を伝えようとしている。

3. この話を知っている人なら、彼自身の人生に伝統的な生得権の切り替えがあったのと同じように、2人の孫の人生にも切り替えがあったことを知っているだろう。

4. マナセは長男であり、当時の伝統や習慣では、マナセがより大きな祝福を受けるべきであった。そしてヨセフはマナセをヤコブの右側に置いて、マナセを祝福するように父を仕向けようとさえたが、ヤコブは二人に祝福を宣言するとき、承知の上で、年下のエフライムに手を置いた。

5. ヨセフは祝福の最中にヤコブを呼び止め、ヤコブが間違っただけに手をかけている、マナセに手をかけなければならない、と訂正させようとしたが、ヤコブはこう答えた。しかし、まことにその弟は彼よりも大いなる者となり、その子孫は多くの国民となるであろう。(創48:19)

6. ヤコブがエサウの上に置かれたように、エフライムはマナセの上に置かれた。

D. 信仰によって、ヤコブは文化的規範や伝統に逆らい、年長者よりも年少者を祝福した。

1. 祝福を受けるのは長子のはずだった。しかし、ヤコブは信仰生活を通して、時には文化に逆らうことが求められることを学んだ。時には、世界の他の人々がしていることとは違うことをする必要はある。

2. ヤコブは、たとえそれが文化や家族の伝統に反するものであっても、神を信頼することを学んだ。ヤコブは神を礼拝し、神を敬うこと以上に文化的規範を気にしなかった。

3. もしかしたら、それは今日の私たちの教訓かもしれない。文化や人の伝統に支配されることなく、神のために生きることの大切さを、神は私たちにヤコブから学ばせようとしておられるのかもしれない。

4. イエスはカウンターカルチャーだった。彼はタブーとされることを行ったが、彼は気にしなかった。

5. 文化が何を言っているか、伝統が何を言っているかを気にすることなく、ただ神が言われることに従順であり、神が私たちを見届けてくださることを信頼する。

E. 22節の家長の最後とヨセフの信仰を見てみよう。

VI. ヘブル11:22; ヨセフの信仰

A. ヨセフの人生について不思議なことは、もし私が信仰のハイライトとして際立っているものをひとつ挙げろと言われたら、それをするのはとても難しいということだ。ヤコブのように考えるべきことがたくさんないからではなく、正反対なのだ。ヨセフは模範的な信仰生活を送った。彼は

彼は最も困難な状況の中でも信仰を続け、決して信仰をくじくことなく、神は彼を通して驚くべきことをなされた。

B. ヨセフは、幼い頃に神から与えられた夢や幻を大胆に伝える信仰を持っていた。彼は、自分の兄弟たちが彼に敵対し、奴隷として売られたときも信仰を守った。誘惑の絶好の機会を与えられても信仰を保ち、肉に甘んじる代わりに神を敬うことを選んだ。濡れ衣を着せられ、牢獄に入れられたときも信仰を守った。自分が助けた人々から忘れられたときも信仰を守った。彼はパロの前で神への信仰と、パロの夢を解釈する神の能力を大胆に宣言した。彼の全生涯は、信仰と大胆さの人生であり、単に私たち皆のための驚くべき模範であった。

1. 自分のために、ヨセフの生涯について人物研究をしてみるといい。あなたは祝福されるだろう。

C. そして、ヨセフが行った驚くべき事柄のいずれかを語る機会を得た著者が、ヨセフが死期を迎えたとき、信仰によってイスラエルの子らの旅立ちに言及し、彼の骨に関する指示を与えたという事実に焦点を当てたことは、私の驚きを想像していただけるだろう。

1. 数あるものの中から、この殿堂で取り上げようとしているのがそれなのだろうか? このような注目すべきものを作ったのは何だったのか?

2. 私は思う。ヨセフは非常に成功した人物になっていた。彼はエジプト全土を統括する副官になった。ヨセフ以上の権力、権威を持っていたのはパロアだけだった。パロはすべてをヨセフの手に委ねた。

3. ヨセフは家族をエジプトに連れて行き、良い生活を味わわせた。聖書は、彼らがゴシェンの地に財産を持ち、非常に成長し、増えたと伝えている。(創世記47:27)。

4. すべてが順調で、最高のいた。しかし、ヨセフは何かを知っており、死に際の言葉で、エジプトは彼らの故郷ではないことを家族とイスラエルの人々に思い出させた。エジプトは彼らのいるべき場所ではなかった。神が彼らを召された場所にいる必要があったのだ。そして信仰によって、彼はイスラエルの子供たちの旅立ちについて、彼らがいづかエジプトを出て、神が彼らに約束された地に入ることに言及した。そして人々に、他のエジプトの指導者たちと同じように、自分の骨をピラミッドに埋葬しないようにと指示を与えた。彼は、イスラエルの子供たちがエジプトの地を出発し、神に召された土地に入る日に、彼の遺骨をイスラエルの子供たちと一緒に持ってくることを望んだ。

5. ヨセフの信仰は、ここも私たちの故郷ではないことを思い出させてくれる。私たちは、主が造り主である都と国のために生きているのだ。信仰によって、ヨセフは次の世代に、彼らの人生に課せられた召命と、彼らを待ち受ける相続について語った。

6. そして私たちが教会にとって、このことは神が私たちに突きつけたいと願っておられることだと思う。水曜日、私は同じことを、この本の学びの中で述べた。

しかし、私たちができる最大のことは、後の世代に神の遺産を残すことだと私は信じている。

7. 私はクリスチャンホームで育たなかったので、青春時代には神の遺産の影響を受けず、多くの愚かな決断を下し、多くの愚かなことをした。
 8. ヨセフは、土地、財産、富、あらゆる種類の繁栄など、すべてを手にしていました。しかし、彼の最大の関心事は、家族がエジプトで暮らし続けるための準備をすることではなく、彼らを主に、そして彼らが主とともに持つ嗣業を指し示すことだった。それこそが最も重要なことであり、私たちがこれらの家長たちから学ぶ教訓なのだ。彼らは皆、信仰を次の世代に伝えることに忠実だった。
 9. 両親、祖父母、叔父叔母、姉妹、兄弟たちよ、次の世代に神の遺産を引き継ぐことを優先して信仰生活を送ることを勧めてもいいだろうか？ 天の御国に投資し、何世代にもわたる神の遺産を築くことを後悔することはないだろう。
- D. 私受け継がれた世代的な信仰を継続するか、あなたの後に来る人々のために世代的な信仰を始める者となることができるように。神の恵みと信仰によって、私たちは想像を絶する偉大な遺産を受け継ぐことができる。祈ろう。